

2. 中学校調査結果の分析

(1) 第一次報告書に基づく再分析

中学校調査で用いた調査票は、①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査（学校調査）、②学級担任の意識調査（学級担任調査）、③在校生の意識調査（生徒調査）、④在校生の保護者の意識調査（保護者調査）、⑤過年度卒業者の意識調査（卒業生調査）の五つである。

ここでは、第一次報告書において整理した調査票ごとの個別設問への回答結果を踏まえつつ、今後のキャリア教育の更なる推進・充実のために特に重要な側面に改めて注目し、調査票間を横断的に捉えた再分析を試みる。

まず、中学校調査の再分析に当たって設定したテーマとその設定理由を述べる。

テーマ1 指導内容・方法の充実

第一次報告書で示したとおり、キャリア教育の全体計画・年間指導計画とも、約8割の中学校で作成されており、計画的な取組は定着化が進んでいると言える。しかし同時に、指導計画が策定されていながら、その実践が生徒のキャリア発達の促進に必ずしも結びついてはいない現実も明らかになった。ここでは、生徒のキャリア発達を一層促進し、社会的・職業的自立のために必要な基盤となる能力の向上を図る指導のあり方を探るため、指導内容・方法の工夫と充実について再分析を行う。

テーマ2 将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応

平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」は、「目標とする進路が達成できない場合や、途中で変更せざるを得ない場合が多々あるにもかかわらず、経済・社会・雇用の仕組みについての知識や様々な状況に対処する方法を十分に身に付けていない若者が多いと指摘されている」と述べ、社会の現実を視野に収めた積極的なキャリア教育の必要性に言及している。しかしながら、中学校におけるキャリア教育の実践はこの点における弱さを残しているのが現状である。ここでは、各調査票から関連する項目の結果を抽出・比較し、今後の取組の改善につなげるための方策を探る。

テーマ3 キャリア教育における評価

上掲の中央教育審議会答申では、「キャリア教育の実践が、各機関の理念や目的、教育目標を達成し、より効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを具体化した教育プログラムの評価の項目を定め、その項目に基づいた評価を適切に行い、具体的な教育活動の改善につなげていくことが重要である」としている。しかし、キャリア教育における評価は多くの中学校で不十分な状態にとどまっている。ここでは、評価の現状に注目した再分析を行い、校内研修のあり方も含めてその改善の方向性について検討する。

テーマ1 指導内容・方法の充実

キャリア教育の指導内容と方法の工夫で生徒が変わる

今ある宝（授業）に教師が工夫を加えて、生徒のキャリア発達を促進させていきましょう。

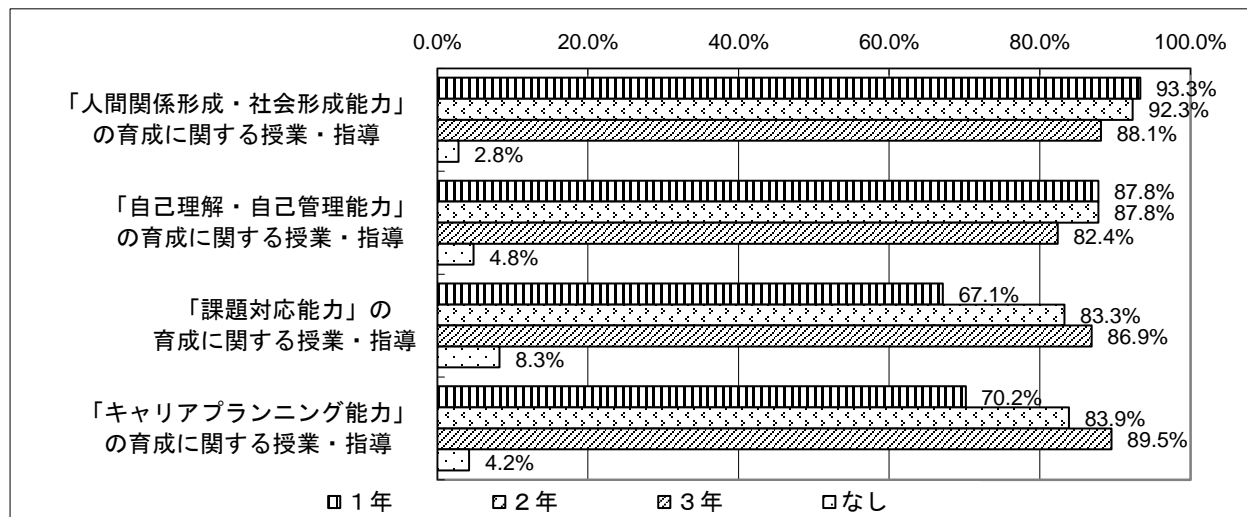
- 基礎的・汎用的能力に関する指導は、どの学年でも高い割合で指導されている。
- 担任が重要と感じ重点をおいて指導したことが、生徒の中では定着していないという現状がある。
- 職場体験の事前・事後指導は重要性が理解され、高い割合で指導されている。
- 職場体験の事前・事後指導において、「キャリア教育の視点から見た活動内容」をみると、指導の実施が不十分であるという現状がある。

① 基礎的・汎用的能力に関する指導状況について

基礎的・汎用的能力に関する指導状況を見ると、第1学年での「『課題対応能力』の育成に関する授業・指導」と「『キャリアプランニング能力』の育成に関する授業・指導」が80%には達していないが、それ以外の内容については全学年80%を超える高い割合で指導されており、指導の定着が進んでいることがわかる*¹。

また、「キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況」*²においても、学年によって実施する内容の差はあるが、1年生では「自分を理解する学習」76.3%、「将来設計全般に関する学習」60.2%、2年生では「事業所（企業・福祉施設・公共施設など）における体験学習（職場見学、職場体験活動、ボランティアを含む）」87.8%、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」79.4%、3年生では「高等学校など上級学校への訪問や見学、体験入学、学校説明会」95.8%、「高等学校など上級学校への訪問や見学、体験入学に関わる事前・事後指導」93.6%と高い割合でキャリア教育に関する内容が指導・実施されていることがわかる。

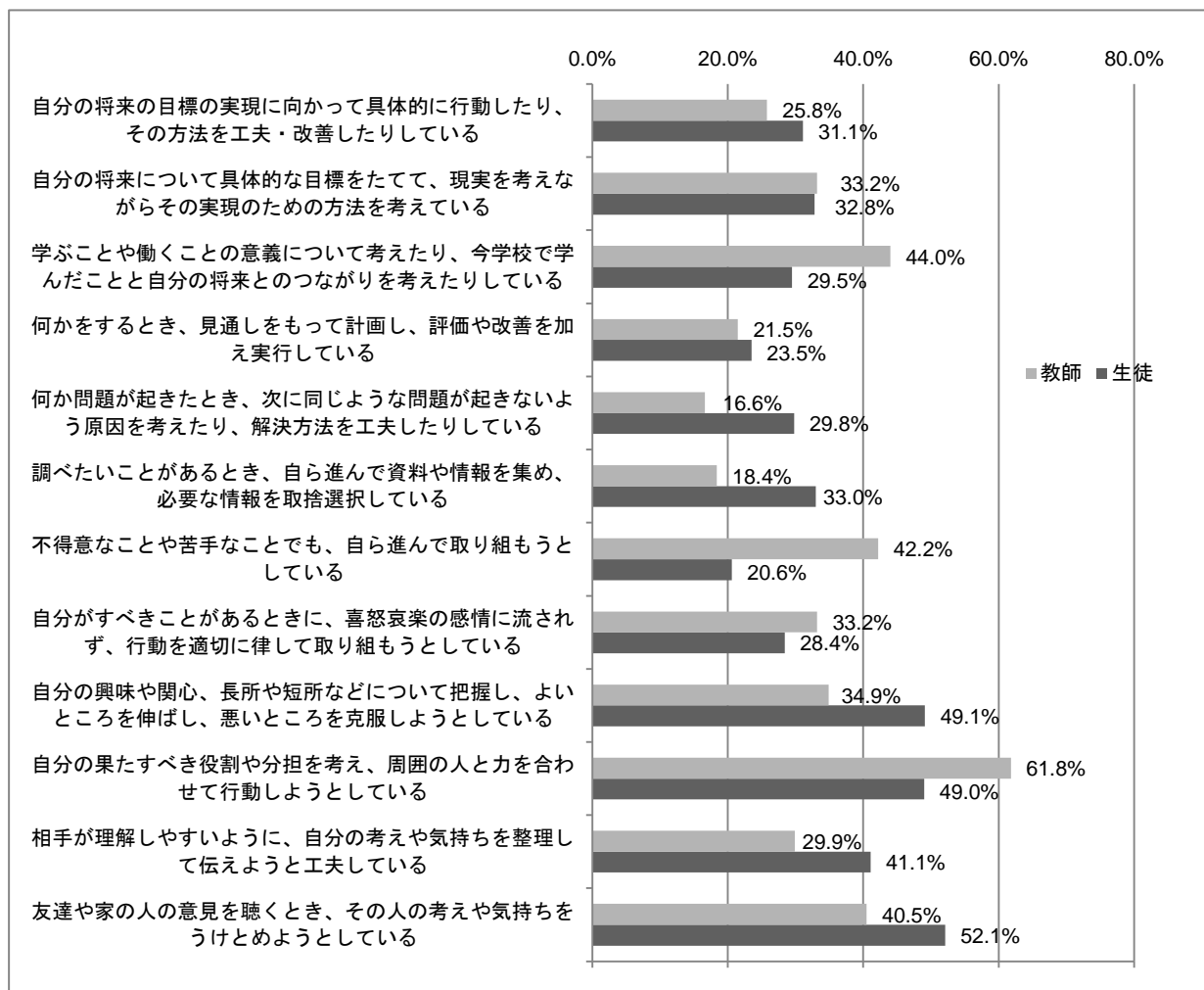
【図1】基礎的・汎用的能力に関する指導状況について（学校調査）



② 教師の指導と生徒のキャリア発達との差異について

このように「基礎的・汎用的能力」に関する指導の実践はかなりの割合でなされている。しかし、学級担任調査の「キャリア教育を行う上で、重点をおいて指導していること」*³と生徒調査の「生活の様子を振り返ったときにあてはまるもの」*⁴を比較してみると、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとしている」では、担任の61.8%が重点をおいて指導していると回答しているが、「日常生活でそうしている」と回答した生徒は49.0%である(図2)。同様に「学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んだことと自分の将来とのつながりを考えたりしている」では担任44.0%、生徒29.5%、「不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしている」では、担任42.2%、生徒20.6%と差異が大きく、担任が生徒のキャリア発達には重要だと思って指導していることが、必ずしも生徒のキャリア発達に結びついていない(成果が上がっていない)ことがわかる。

【図2】教師の指導と生徒のキャリア発達との差異について(学級担任調査・生徒調査)



③ 生徒が役に立ったと思う指導内容について

キャリア教育に関する学習の機会の実態をみると、全10項目のうち「卒業生の体験発表会」を除く9つの項目で、8割以上の生徒に学ぶ機会があった*⁵。そのうち、生徒が積極的

並びにある程度積極的に取り組んだ割合は大きく異なっているが、積極性をもって取り組めた割合が8割を超える項目としては「職場の見学」(80.1%)、「職場での体験活動」(83.6%)がある。これらの内容については、「将来の生き方や進路を考える上で役に立った」と回答している生徒の割合が「職場の見学」では81.4%、「職場での体験活動」では84.1%となっている(役に立った、少しは役に立ったの合計値)*⁵。生徒が積極的に取り組めた活動については、将来の生き方や進路を考える上でも役に立ち、成果も高いということがいえる。

④ 今後の方向性

1) 集団への指導と個別の支援

キャリア教育の意義・重要性についての理解が進み、その取組の定着も進んでいる。特に体験活動の意義や重要性については十分に理解されており、ほとんどの学校で重点的な実践が見られる。しかし、キャリア教育の実践を総体的に捉えた場合、指導内容は必ずしも十分と言える状況ではない。生徒は一人一人発達の過程が異なっていることを踏まえ、集団を対象とした指導やガイダンスと並行して、一人一人への働きかけ、いわゆる個別の支援が不可欠である。例えば、職場体験での事前の学習内容がどこまで生徒一人一人の中で深まっているのか、同様に事後の指導においても体験を通して達成すべき課題は何であったのか、達成に向けての取組はどうであったのかなど個人に活動を振り返らせ、深めさせることが求められる。ポートフォリオやキャリアノートなどの蓄積、加えてキャリア・カウンセリングの充実など、一人一人へのきめ細やかな支援が求められる。また、教科・科目を通じたキャリア教育など、集団を対象とした指導やガイダンスにおいても、改善の余地は大きく残されている。

2) 系統的な指導と指導の改善

生徒調査において、「指導してほしかったこと」として多く挙げられた項目のひとつに「自分の個性や適性を考える学習」がある。自己理解の学習は1年時に多く実施される傾向にあるが、進路選択には不可欠な内容であることから、3年間を通じた系統的な指導を実施する必要があるだろう。常に指導とその成果を評価し、指導内容と方法の改善を図っていくことが重要である。しかし、学級担任調査「学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施の現状」についての設問*⁶で、「キャリア教育に関する指導案や教材の作成等を工夫している」と回答したのは22.5%、「キャリア教育に関する研修などに積極的に参加し、自己の指導力の向上に努めている」は8.4%と低い割合になっている。

指導の実施に当たっては、既存の内容や方法を踏襲するだけでなく、常に生徒の実態に応じてその内容や指導方法を工夫していくことで生徒のキャリア発達を促していきたい。そのためには、生徒の実態を適切に把握するための教員集団による情報交換や、指導のあり方に関する研修の実施が極めて重要といえる。

3) 保護者の積極的な協力

また保護者調査における設問「キャリア教育や進路指導において期待する学習内容」において、「学ぶことや働くことの意義を考えさせる学習」が90.8%と最も高く、次いで「適切な進路選択の考え方や方法についての学習」は88.1%となっており、同じく保護者調査における設問「学校における授業や生活で指導してほしいこと」の回答結果をみると、人間関係形成・社会形成能力、課題解決能力に関する指導などにも幅広く期待を寄せていることがうかがえる*7。保護者は決して上級学校への進学のみ偏った指導内容を望んでいないのである。また、「学習意欲向上認知の有無別に見た学級・学年における、キャリア教育の計画・実施の現状」(中学校(2)、図9、P67)からも、「学校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している家庭」の生徒ほど学習意欲が高いという結果もあり、保護者の積極的なキャリア教育への参加・協力を得つつ、ともにキャリア教育を推進していく環境を作っていくことが有効である。

参考：第一次報告書における参照データ

*1	P131	中学校・学校調査	問11
*2	P132	中学校・学校調査	問12
*3	P151	中学校・学級担任調査	問5
*4	P169	中学校・生徒調査	問9
*5	P172	中学校・生徒調査	問11、 P172 中学校・生徒調査 問12、
*6	P148	中学校・学級担任調査	問3
*7	P188	中学校・保護者調査	問9、 P191 中学校・保護者調査 問11

テーマ2 将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応

中学生が「今」知りたいのは、
「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」についての正確な知識
「指導する機会の充実」と「指導内容の改善」を図りましょう。

- 自分の将来の生き方や進路について考えるため、学級活動の時間などで就職後の離職・失業など、将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応についての指導を望んでいる生徒は少なくない。
- 多くの学校が、「就職後の離職・失業など、将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応に関する学習」を実施していないと回答。
- 「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」に対する保護者の期待は、他の学習への期待に比べて低い。

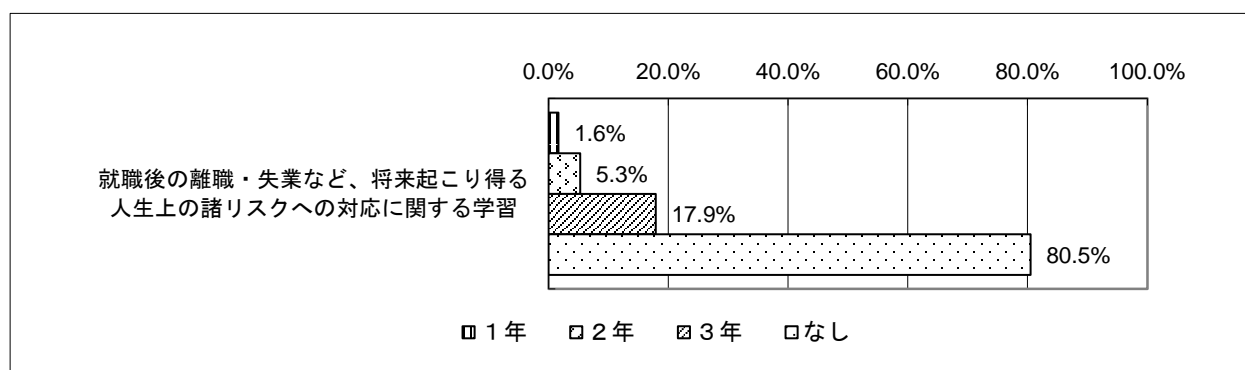
① 学校・学級担任と生徒・卒業者の意識の比較

「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」についての指導の現状を、学校、学級担任、生徒、卒業者の各調査結果から明らかにする。

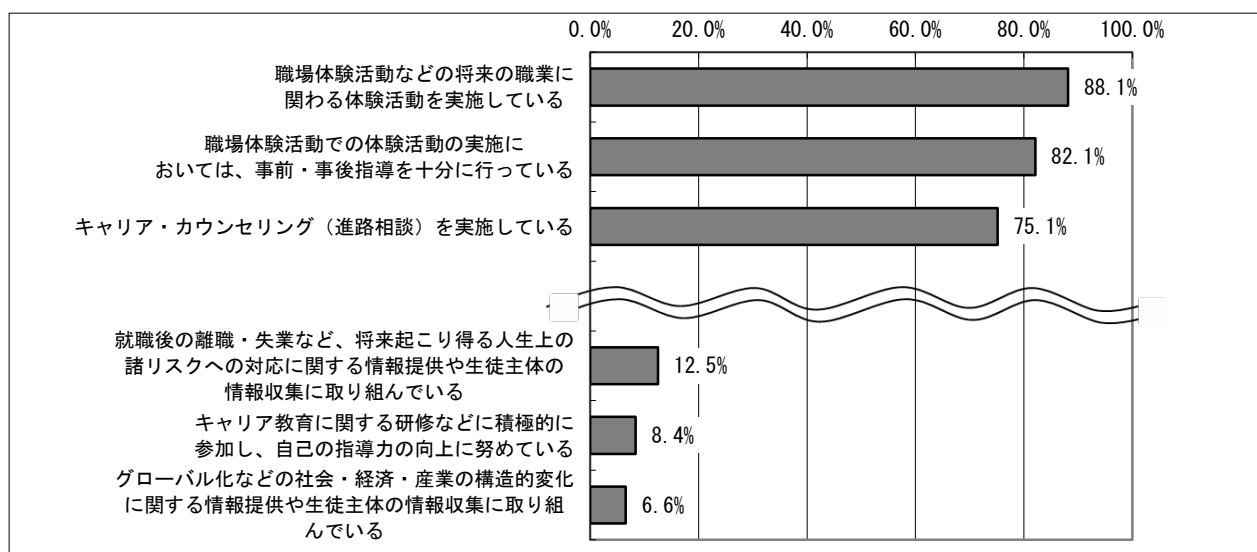
まず、学校調査では、「教育課程の中で、生徒を対象に企画・実施しているキャリア教育に関する学習の機会や内容」について、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習」を実施していないと回答した割合が8割を超えている（図1）*¹。つまり、ほとんどの学校でそのような学習が行われていないことがわかる。

学級担任調査においても、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」と回答した割合が1割程度と、指導しようと考えている学級担任も極めて少ないといえる（図2）*²。

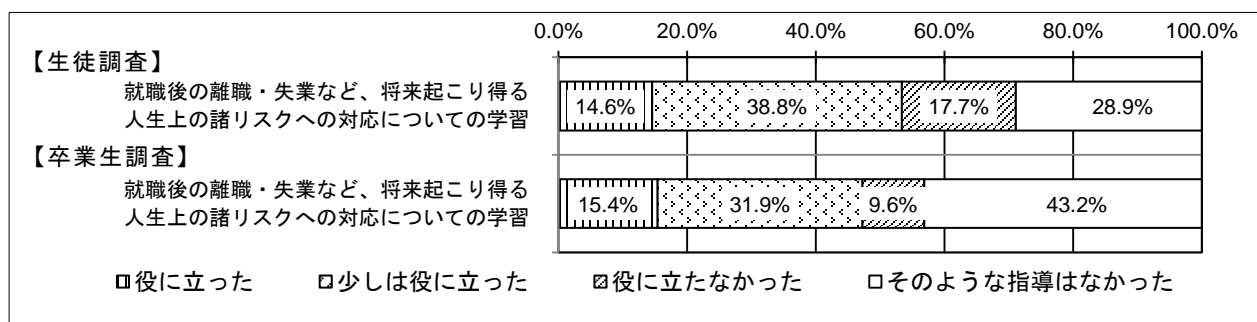
【図1】キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況（学校調査）



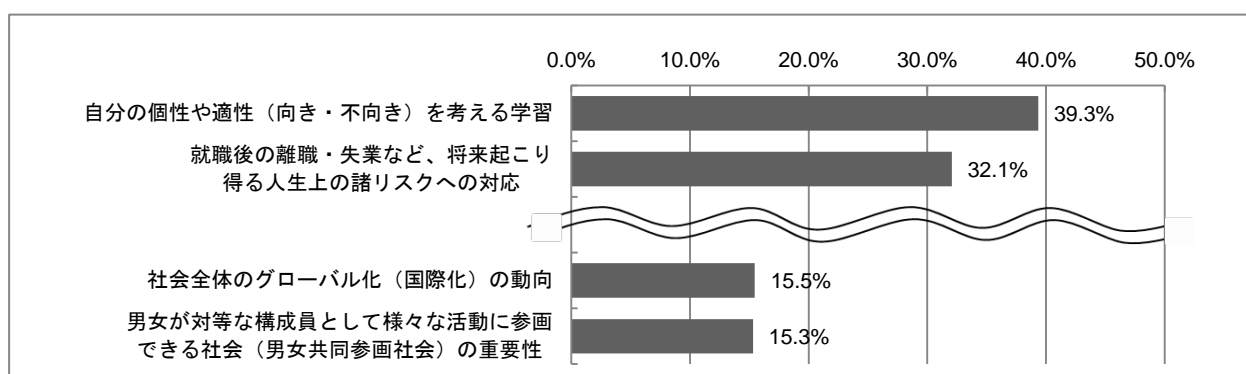
【図2】学級あるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状（学級担任調査）



【図3】将来の生き方や進路を考える上で役に立った指導内容（生徒調査・卒業生調査）



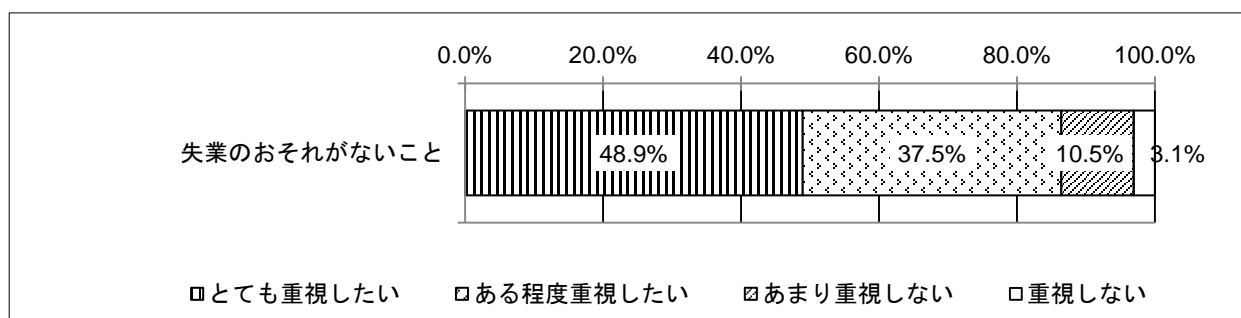
【図4】将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと（生徒調査）



生徒調査では、同様の内容に関する学習や受けた指導が自分の将来の生き方や進路を考える上で役に立ったと回答した割合は 14.6%にとどまり*³、卒業生調査においても 15.4%と低い割合となっている（図3）*⁴。

しかしながら、そのような内容を指導してほしかったと回答した生徒は 32.1%と、全 17 項目の中で 2 番目に高い割合となっている（図4）*⁵。

【図5】自分の職業や仕事を選ぶ際に重視すること（生徒調査）



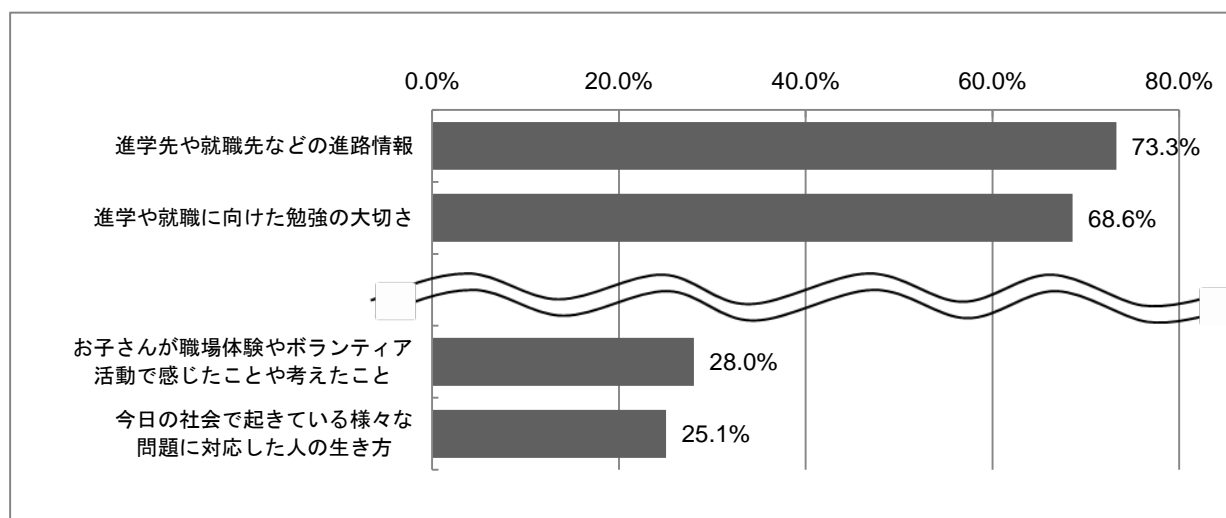
また、「将来どのようなことがらを重視して自分の職業や仕事を選びたいと思いますか」については、「失業のおそれがないこと」を「とても重視したい」と回答した割合が48.9%と全体の3番目に高い割合となっていることから*6、生徒は「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」についての学習機会の充実と内容の改善を望んでいるといえる。

② 生徒と保護者の意識の比較

次に、生徒と保護者が「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」について、それぞれどのような意識をもっているかを述べる。

前述したとおり、3割を超える生徒が自分の将来の生き方や進路について考えるため、学級活動の時間などで就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応についての指導を望んでいる*5。一方、保護者に同様の質問をしてみると、そのような指導をととても期待している、又は、ある程度期待していると回答したのは、54.8%であった*7。これは、順位で見ると20項目中5番目に低い割合ではあるが、生徒が期待するよりも高い割合になっている。3割を超える生徒、そして過半数の保護者が将来の諸リスクへの対応についての指導を期待している。

【図6】将来の生き方や進路についてお子さんと話し合った内容（保護者調査）



また、生徒と保護者が将来の生き方や進路に関して話し合っている内容に関する調査結果をみると、「今日の社会で起きている様々な問題に対応した人の生き方」について話し合っているとした保護者の割合が 25.1%と、最も低かった*8。

③ 今後の方向性

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成 23 年 1 月）が示すように、「将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応」は、キャリアを積み上げていく上で最低限必要な知識として、また、自らの将来に関わることとして非常に重要なものである。高等学校等への進学率が 98.3%（文部科学省「学校基本調査」平成 24 年）という高い水準にある現状を考えれば、目の前の生徒にとって、その学習は次のステージで行われるものであるという認識をもつ学級担任は少なくないだろう。もちろん、学校から社会への移行とその後の社会生活・職業生活の具体的展望を見据えたキャリア教育が特に必要となる高等学校において、その学習が重要になることは高等学校調査結果の（1）再分析テーマ 2 の②（P75）が示すとおりである。しかしながら、中学生もその内容についての正確な知識を「今」望んでおり、高等学校等を卒業した後のことにも目を向けているという現状が調査結果から浮かび上がる。学校は、指導する機会の充実と指導内容の改善を図り、上記の内容を保護者に確実に伝えた上で、家庭と互いに連携しながら指導を進めていくことが重要であると考え。今後の取組に期待したい。

参考：第一次報告書における参照データ

*1	P132	中学校・学校調査	問 12
*2	P148	中学校・学級担任調査	問 3
*3	P173	中学校・生徒調査	問 12
*4	P205	中学校・卒業生調査	問 8
*5	P175	中学校・生徒調査	問 13
*6	P168	中学校・生徒調査	問 8
*7	P188	中学校・保護者調査	問 9
*8	P180	中学校・保護者調査	問 3(2)

テーマ3 キャリア教育における評価

学級担任が知りたい「キャリア教育の評価の仕方」

目標設定が鍵

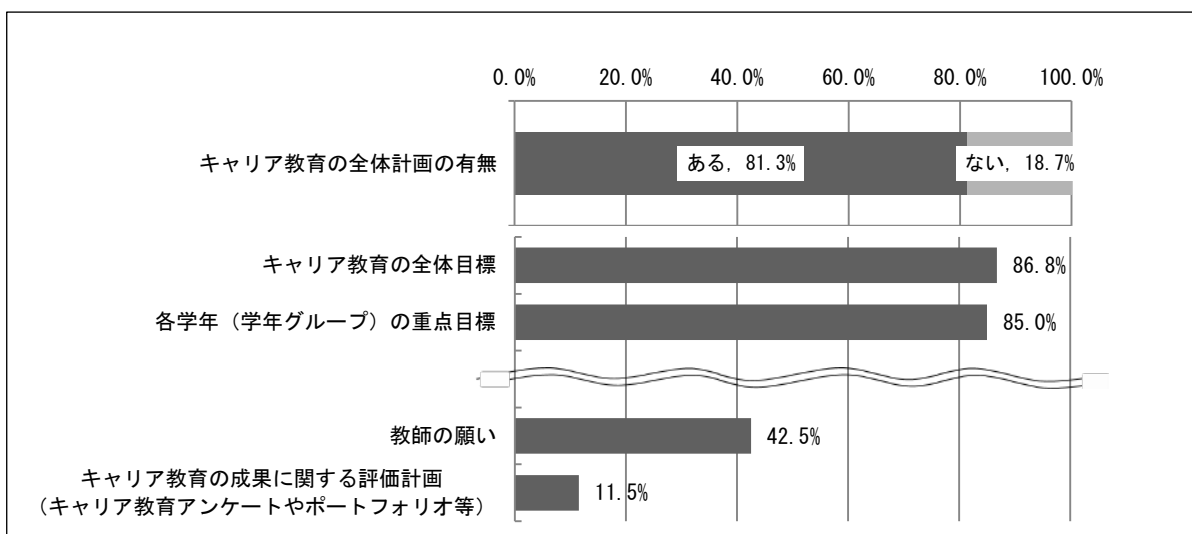
「評価計画の作成」と「研修機会の充実」により対応しましょう。

- キャリア教育の成果に関する評価計画を全体計画に記している中学校は極めて少ない。
- 評価の仕方を知りたいと考えている学級担任は7年前に比べて増加傾向にあると推測される。
- 多くの学級担任が、キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからないと悩んでいる。
- キャリア教育の評価に関する研修を行った中学校、参加した学級担任はともに少なく、研修の機会は不十分である。

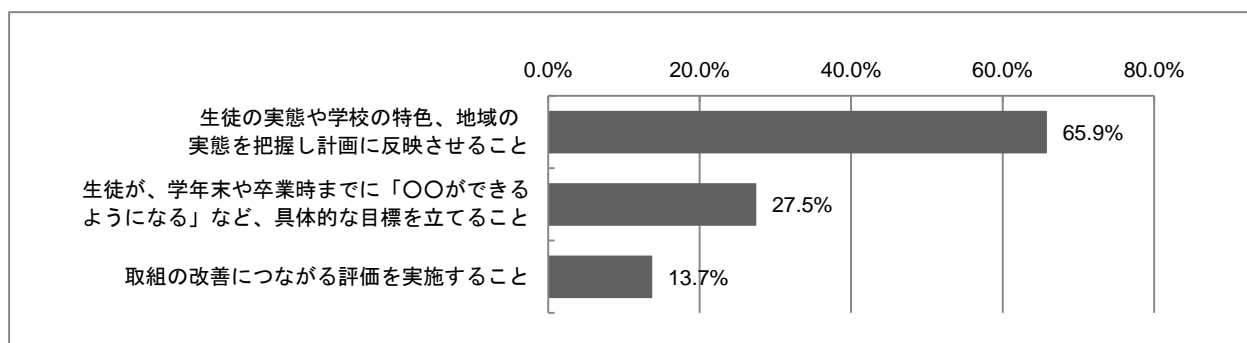
① キャリア教育の成果に関する評価計画の作成状況について

キャリア教育に関する全体計画があると回答したのは中学校全体の81.3%、そのうちキャリア教育の成果に関する評価計画が具体的に記されていると回答したのは11.5%であった*¹。中学校全体でみると1割にも満たないという極めて低い状況にあり、中学校においてはキャリア教育の成果に関する評価計画がほとんど存在しないことがわかる。

【図1】キャリア教育の全体計画の有無と計画に記されている内容（学校調査）



【図2】キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと（学校調査）



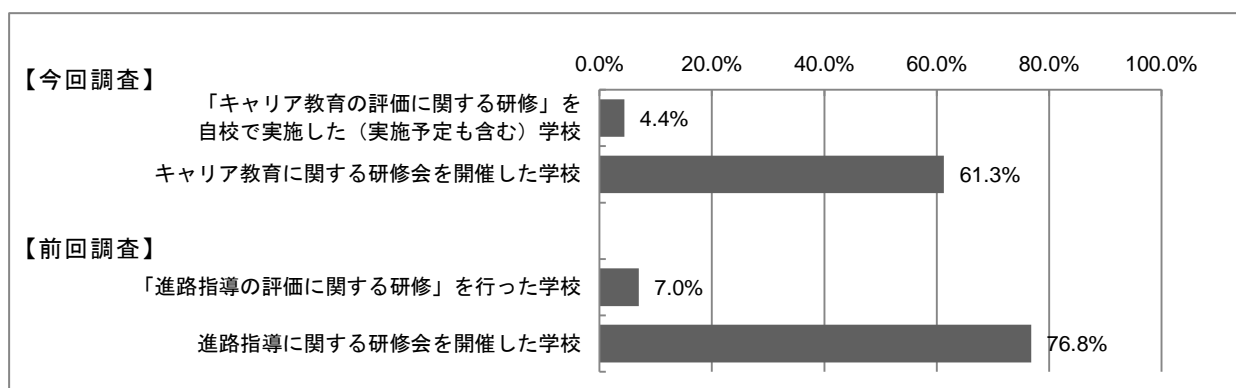
他の設問「キャリア教育の計画を立てる上で、重視したことがらはどれですか」*²では、「取組の改善につながる評価を実施すること」は13.7%とかなり低い。評価が不可欠な要素であるという認識が低いと考えられる。また、「生徒が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること」を選択した割合も27.5%と低い。キャリア教育の実践がより効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを具体化した教育プログラムの評価が必要であることを考えれば、その認識も不十分であるといえる。

② キャリア教育の評価に関する研修の実施状況について

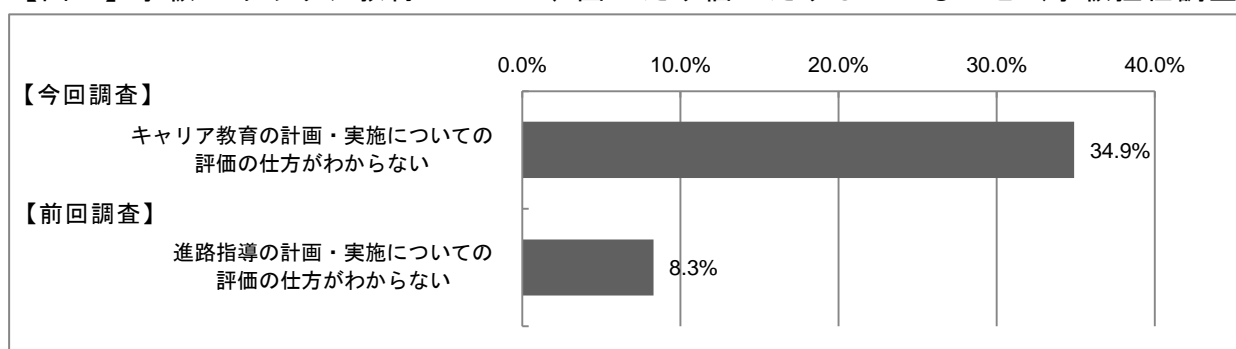
校内研修の実施状況について、今回の調査と前回の調査の結果を比較する。今回の調査では、「キャリア教育の評価に関する研修」を自校で実施した（実施予定も含む）学校の割合は4.4%であった（図3）（キャリア教育に関する研修を実施した学校は全体の61.3%）*³。前回調査（平成17年）においては、「進路指導の評価に関する研修」を行った学校の割合が7.0%であった（進路指導に関する校内研修は76.8%の学校が実施）。このことから、進路指導とキャリア教育と表現の違いはあるが、それらに関する校内研修自体が減少傾向にあり、それに伴って評価に関する研修を行う割合も減少しているといえる。

学級担任の意識をみると、24.0%が学級でキャリア教育を適切に行う上で、キャリア教育の成果に関する評価をすることが今後重要になると考えている*⁴。一方、34.9%が学級のキャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからず困惑しているという現状がある（図4）*⁵。後者に関しては、前回調査（平成17年）における類似の質問に対する回答が8.3%であったことを考えると、キャリア教育の評価に対する関心が高まってきたと同時に、その具体的な方法に悩む教員が大幅に増えたといえる。

【図3】キャリア教育・進路指導の評価に関する研修の実施状況（学校調査）



【図4】学級のキャリア教育について、困ったり悩んだりしていること（学級担任調査）



③ 今後の方向性

キャリア教育の実践がより効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを達成できたかを把握するための評価のいずれもが必要である。しかしながら、特に評価については計画を立てる上で重視されていない現状がある。

評価とは適切な指標を用いて、目的・目標がどの程度達成されたかを把握することである。その評価の指標を作成するためには、キャリア教育を通して生徒が卒業までに身に付ける力を明確に定義することが必要である。つまり、「生徒が、学年末や卒業時までに『○○ができるようになる』など、具体的な目標を立てること」なしには、明確な評価指標は作成できず、取組の改善につながる評価を実施することは難しい。また、取組の改善につながる評価を実施することの重要性に対する認識が低ければ、具体的な評価指標は作成されず、教員の印象や生徒本人の感覚など、漠然としたものに頼ることになってしまう。これでは、キャリア教育の実践がより効果的な活動とはならない。

生徒の成長・変容には、短期的に見られる変化と中長期的に見られる変化がある。著しい効果が見られても一時的な場合もあるし、すぐに効果が見られなくても、中長期的に効果が認められる場合もある。適切な評価指標を用いて評価をすることは、短期的にも、中長期的にも取組の目的に応じて生徒の変化をとらえる上で、必要不可欠である。これらのことを理解することが、評価の重要性に対する認識を高め、中学校におけるキャリア教育の成果に関する評価計画の作成を促進するものと考えられる。

また、キャリア教育では、教員個人の持ち味を發揮しながらも、互いに協力して指導す

ることによって生徒の多様な学習状況に対応することが可能となる。したがって、教員研修の中でも、とりわけ校内研修を充実させることは、各学校にとって極めて重要なことである。また、校内研修が充実することで、全教員が協働してキャリア教育に取り組む体制の確立につなげることができる。各学校では、職員構成や実践上の課題等に応じて校内研修のねらいや内容を定め、適切な方法により実施できるよう、年間の研修計画に位置付ける必要がある。一方、校長は校外で行われる研修等に積極的に教員を派遣し、その成果を自校に役立てることが大切である。学級のキャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからないと困ったり悩んだりしている学級担任が前回調査の時よりも大幅に増えている現状を考えると、キャリア教育の研修機会や内容がより充実していくことが望まれる。今後の取組に期待したい。

参考：第一次報告書における参照データ

*1	P116	中学校・学校調査	問3(1)①②
*2	P120	中学校・学校調査	問3(4)
*3	P123	中学校・学校調査	問6
*4	P154	中学校・学級担任調査	問8
*5	P153	中学校・学級担任調査	問7

(2) クロス集計の結果

分析結果のハイライト

- ① 全体計画は生徒や担任、保護者の意識や行動に関わりをもっており、キャリア教育の一層の推進という観点からも重要である。
- ② 職場体験活動は、生き方や進路の学習を生徒が重視する程度を高めると同時に、生徒の学校生活への積極性をも高める。
- ③ キャリア教育の推進によって、生徒の学習意欲は向上する。

〈分析によって得られた示唆〉

① 全体計画の重要性

- 1) 「現状把握」は、子供の進路選択に関する保護者の積極性と関連する（学校調査、保護者調査より）

「現状把握あり」の中学校の保護者の方が、子供の進路選択にあたり「参考にしたい」と回答している事項が多く、積極的な傾向がある。

- 2) 「重点目標」は、キャリアに関する取組に対して生徒を積極的にする（学校調査、生徒調査より）

重点目標のある学校の生徒の方が全般的に進路に関わる体験活動に対してより積極的に取り組む割合が高く、概して前向きの姿勢である。

- 3) 「具体的目標設定」は、進路指導の内容に対する生徒の有用感を高める（学校調査、生徒調査より）

「具体的目標設定あり」の中学校の生徒は、将来の生き方や進路を考える上で、進路指導に関わる指導内容が「役に立った」と評価している。

- 4) 「具体的目標設定」は、担任の、キャリア教育の計画・実施に関する重要性の認識を強める（学校調査、学級担任調査より）

「具体的目標設定あり」の中学校の担任の方が、そうでない担任よりも、学級におけるキャリア教育の計画・実施について「とても重要だ」と認識している。

② 職場体験活動の効果

- 1) 職場体験の充実は、日常生活において生徒の積極性を高める（学校調査、生徒調査より）

職場体験活動が充実している学校の生徒の方が、全般的に、そうでない生徒よりも日常生活における諸活動に積極的である。

- 2) 職場体験の充実は、進学する際、将来の仕事に役立つという理由を生徒に意識させる（学校調査、生徒調査より）

職場体験活動が充実している学校の生徒の方が、将来の仕事に役立つ技能等を身に付けることを高校進学理由に挙げる割合が高い。

- 3) 職場体験の充実は、様々な事柄を踏まえて高校選択をしたいという生徒の意識を高める（学校調査、生徒調査より）

③ 学習意欲向上の要因

- 1) 生徒の学習意欲が向上していると認知している学校・担任の方が、より積極的にキャリア教育を推進している

- 2) 生徒の学習意欲が向上していると認知している学校・担任の方が、生徒・保護者も積極的にキャリア教育に取り組んでいると評価している

中学校調査結果に対するクロス集計に当たっては、キャリア教育推進の重要な課題として、「全体計画の重要性」、「職場体験活動の効果」、「キャリア教育の推進と学習意欲」という三つのテーマを取り上げて検討した。

① 全体計画の重要性

各学校のキャリア教育の全体的な方針や計画を示す全体計画の策定は、キャリア教育を推進する上で重要な役割を果たす。それでは、全体計画の具体的内容の観点から、生徒や保護者、担任の意識や行動にどのような違いが見られるのであろうか。各学校に「キャリア教育に関する全体計画」の有無を尋ね、「計画がある」と回答した中学校を対象に、その具体的内容を答えてもらった。具体的内容の回答から次の三つの視点にあてはまるか否かでそれぞれグループを作成した。

全体計画の内容に、「生徒の実態」、「保護者や地域の実態・願い」、「教師の願い」の三つが全て含まれていると回答した中学校を「現状把握あり」群とする。それ以外の学校は、「現状把握なし」群とする。

次に、具体的内容の中に、「学校課題や重点目標」、「キャリア教育の全体目標」、「各学年の重点目標」の三つ全てがあると回答した中学校を「重点目標あり」群、それ以外の学校を「重点目標なし」群とする。

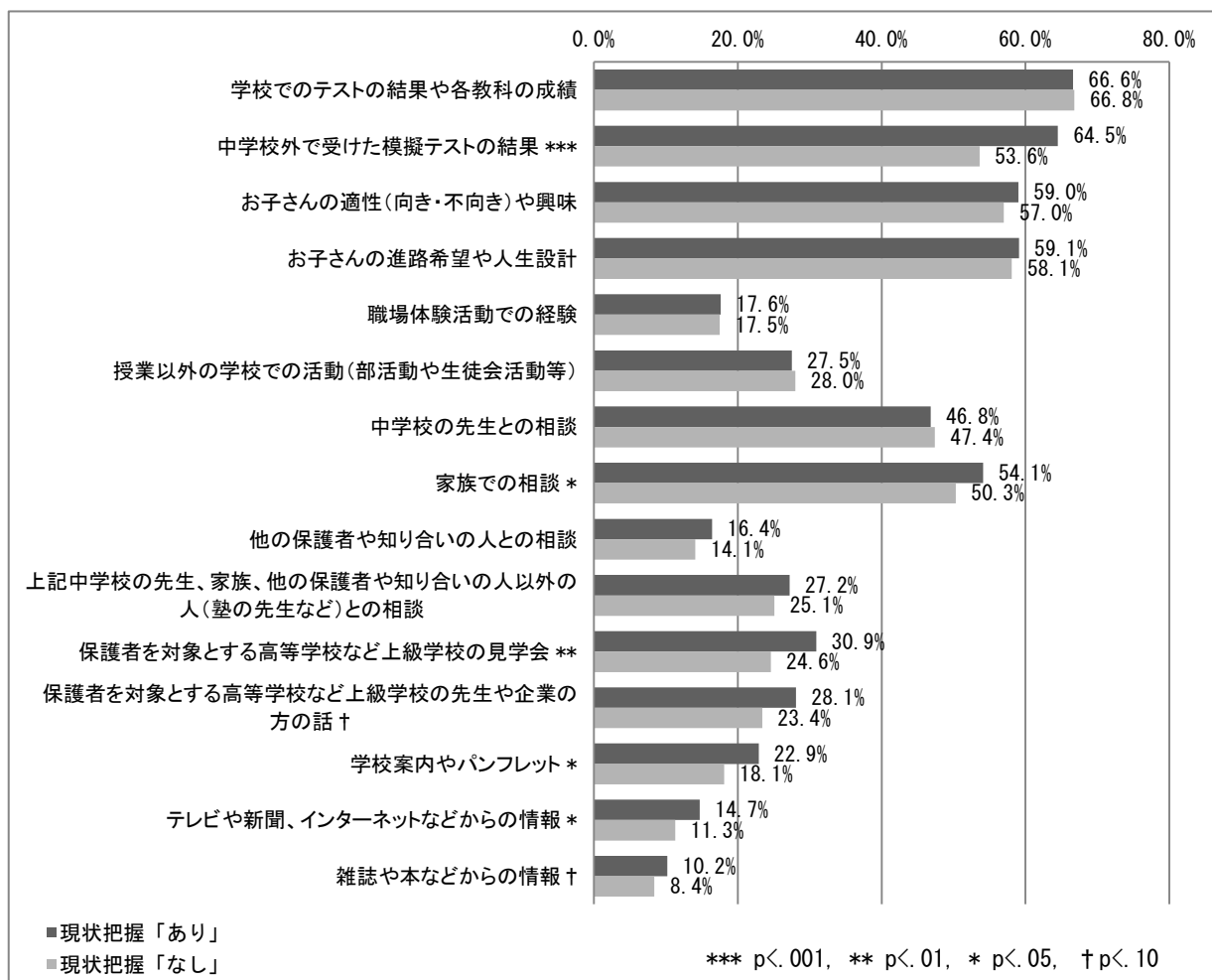
最後に、具体的内容の中に、「学校全体で身に付けさせたい能力や態度（基礎的・汎用的能力との関係）」と「各学年で身に付けさせたい力（基礎的・汎用的能力との関係）」の両方があると回答した中学校を「具体的目標設定あり」群、それ以外の学校は、「具体的目標設定なし」群とする。

1) 全体計画内の「現状把握」は、子供の進路選択に関する保護者の積極性と関連する（学校調査、保護者調査より）

「現状把握あり」の中学校の保護者と「現状把握なし」の中学校の保護者との間で、生徒の進路選択にあたり「参考にしたい」と回答した割合を比較した（図1）。その結果、「現状把握あり」の中学校の保護者の方が、15項目中12項目において「参考にしたい」割合が高く、いろいろな情報を参考にしようとする積極性がうかがわれた。その割合が逆に低いのは3項目あったが、いずれも1%未満の僅差であった。このように積極的な保護者と連携していく上でも、全体計画に「現状把握」—保護者や地域の実態・願い—を明示的に位置付けることは大切なポイントである。

なお、差が比較的大きいのは、「中学校外で受けた模擬テストの結果」（10.9ポイント差）、「保護者を対象とする高等学校など上級学校の見学会」（6.3ポイント差）などであった。大きくはないが、「学校案内やパンフレット」（4.8ポイント差）、「保護者を対象とする高等学校など上級学校の先生や企業の方の話」（4.7ポイント差）などにも差が見られた。

【図 1】現状把握の別に見た保護者が参考にしたい情報（学校調査・保護者調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「中学校外で受けた模擬テストの結果」($\chi^2(3)=29.638, p<.001$)、「家族での相談」($\chi^2(3)=10.137, p<.05$)、「保護者を対象とする高等学校など上級学校の見学会」($\chi^2(3)=13.064, p<.01$)、「保護者を対象とする高等学校など上級学校の先生や企業の方の話」($\chi^2(3)=7.568, p<.10$)、「学校案内やパンフレット」($\chi^2(3)=9.341, p<.05$)、「テレビや新聞、インターネットなどからの情報」($\chi^2(3)=8.180, p<.05$)、「雑誌や本などからの情報」($\chi^2(3)=6.889, p<.10$)であった。

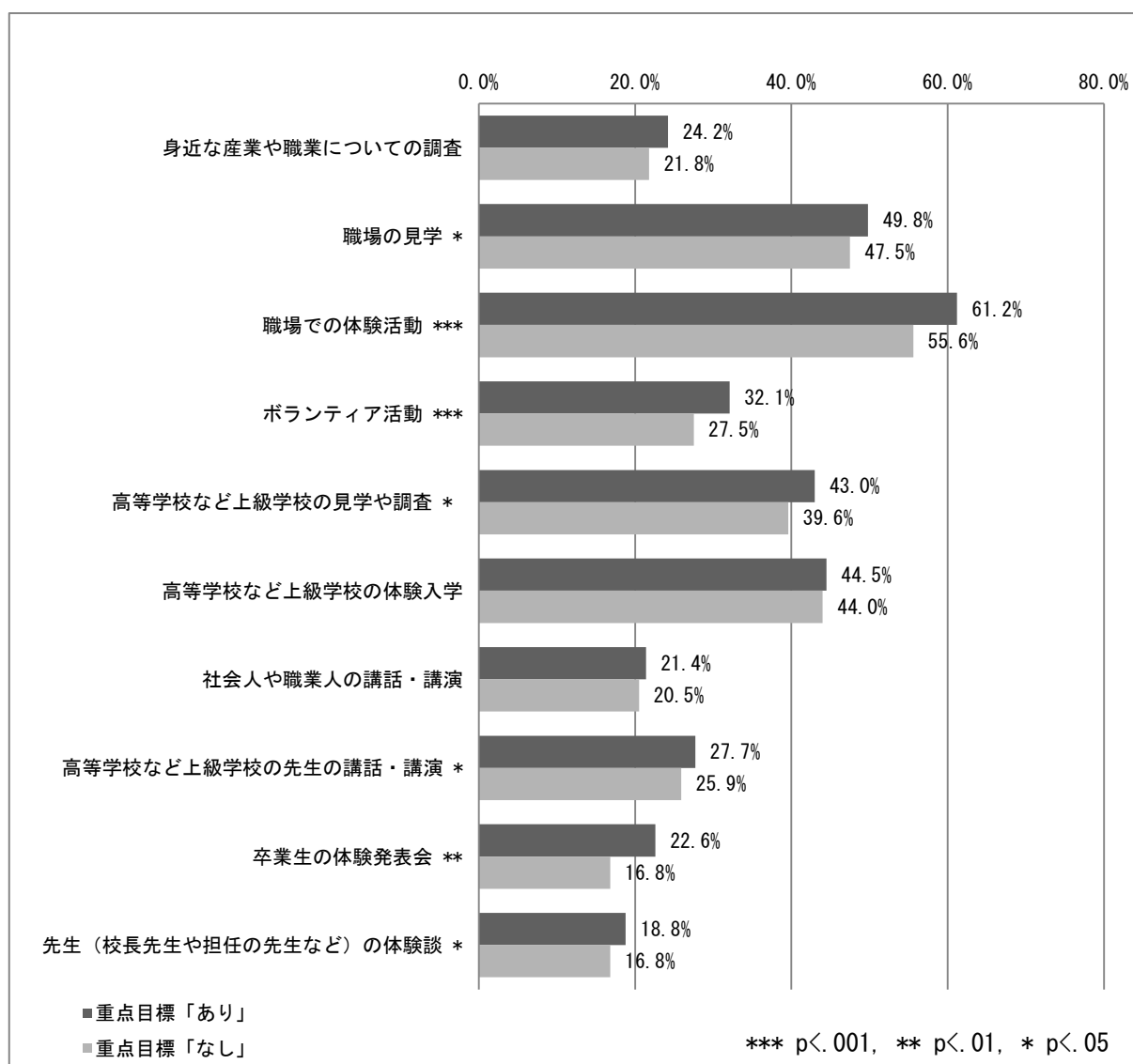
2) 全体計画内の「重点目標」は、キャリアに関する取組に対して生徒を積極的にする（学校調査、生徒調査より）

中学校に入学してからこれまで、生徒は将来の生き方や進路に関わる体験活動に対してどの程度積極的に取り組んだかについて、「重点目標あり」の中学校の生徒と「重点目標なし」の中学校の生徒との間で違いが見られるかを検討した（図 2）。

その結果、「重点目標あり」の中学校の生徒の方が、10 項目全てにおいて割合が高く、進路に関わる体験活動に対してより積極的に取り組んでいた。総花的ではない、めりはりのある目標設定に基づいたキャリア教育実践は、生徒にとっても取り組みやすい可能性があると思われる。

その中でも差が大きいのは、「卒業生の体験発表会」（5.8 ポイント差）、「職場での体験活動」（5.6 ポイント差）であった。大きな差ではないが「ボランティア活動」（4.6 ポイント差）、「高等学校など上級学校の見学や調査」（3.4 ポイント差）などにも差が見られた。

【図2】重点目標の有無別に見た生徒が積極的に取り組んだ体験活動（学校調査・生徒調査）



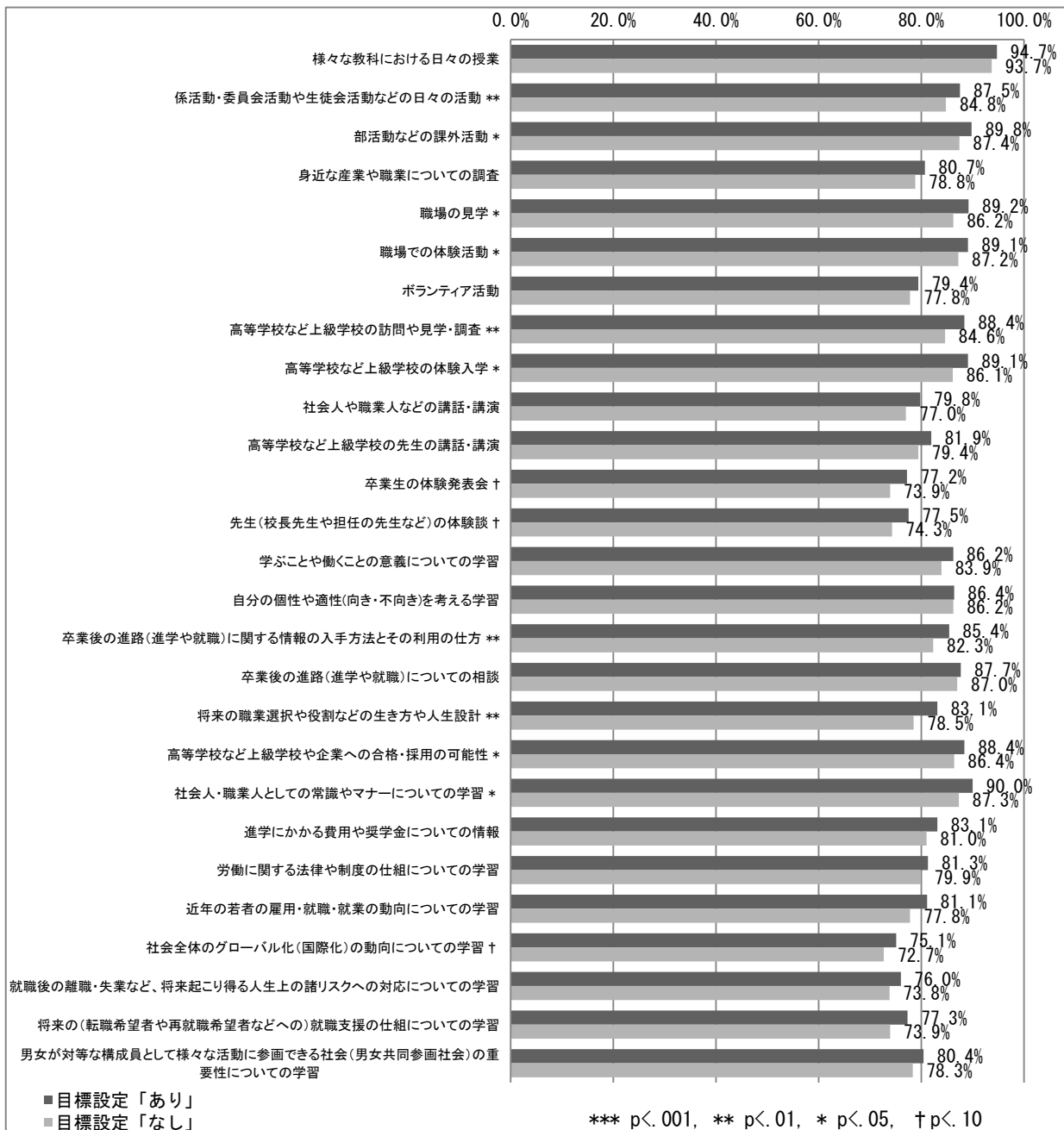
※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「職場の見学」（ $\chi^2(3)=8.232$, $p<.05$ ）、「職場での体験活動」（ $\chi^2(3)=17.938$, $p<.001$ ）、「ボランティア活動」（ $\chi^2(3)=17.103$, $p<.001$ ）、「高等学校など上級学校の見学や調査」（ $\chi^2(3)=8.030$, $p<.05$ ）、「社会人や職業人の講話・講演」（ $\chi^2(3)=7.239$, $p<.10$ ）、「高等学校など上級学校の先生の講話・講演」（ $\chi^2(3)=7.426$, $p<.05$ ）、「卒業生の体験発表会」（ $\chi^2(3)=13.734$, $p<.01$ ）、「先生（校長先生や担任の先生など）の体験談」（ $\chi^2(3)=7.039$, $p<.05$ ）であった。

3) 全体計画内の「具体的目標設定」は、進路指導の内容に対する生徒の有用感を高める（学校調査、生徒調査より）

「具体的目標設定あり」の中学校の生徒と「具体的目標設定なし」の中学校の生徒との間に、将来の生き方や進路を考える上で進路指導が「役に立った」と回答した割合に違いが見られるかを検討した（図3）。

その結果、「具体的目標設定あり」の中学校の生徒の方が、27項目全てにおいてその割合が高く、具体的目標をかかげた全体計画の下行われるキャリア教育のほうが、生徒により有用感を与える傾向が見られた。大きな差とまでは言えないが、一定の差が見られ

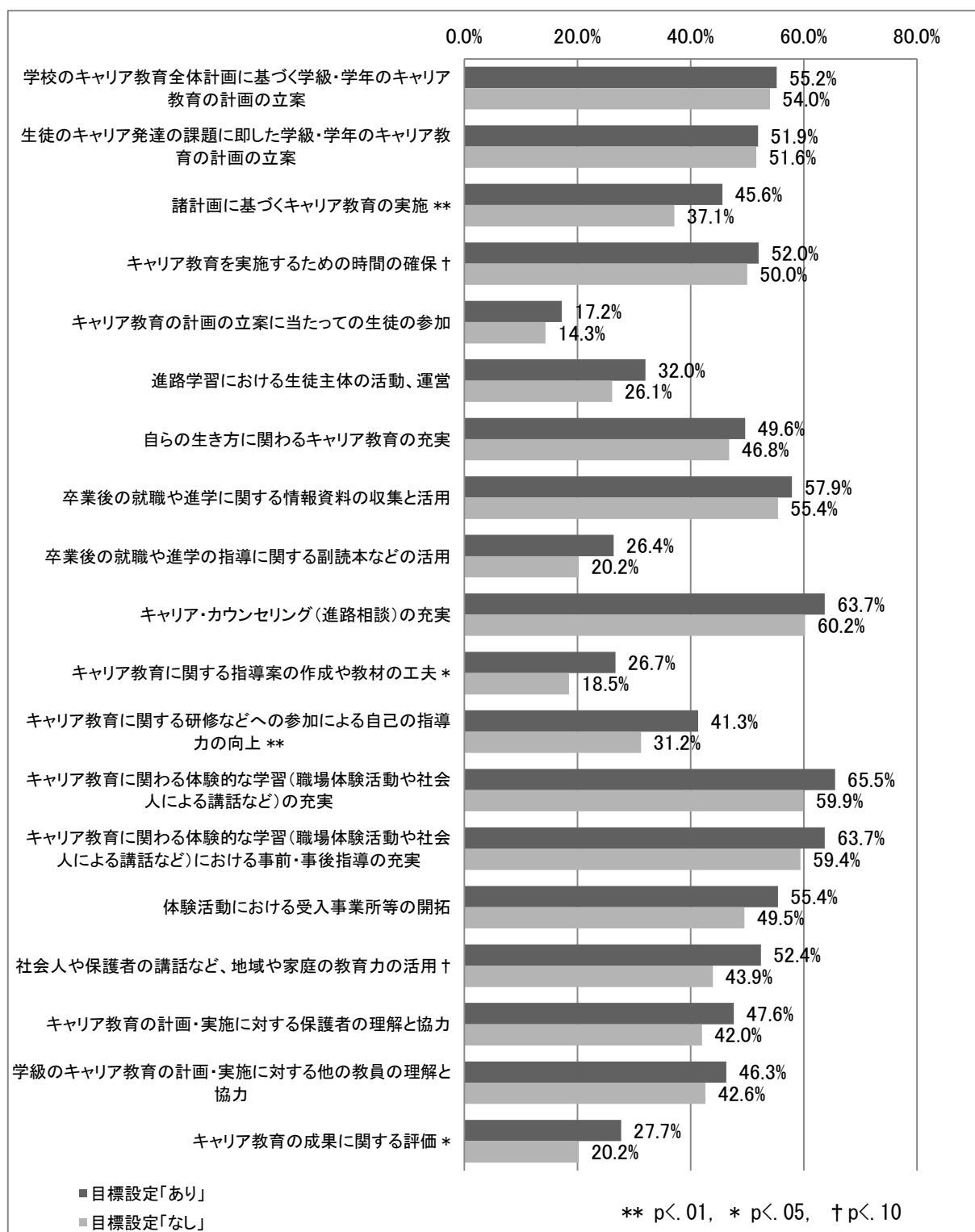
【図3】目標設定の有無別に見た生徒が「役に立った」と評価した進路指導の項目（学校調査・生徒調査）



※ 「役に立った」割合と「少しは役に立った」割合を合計している

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「係活動・委員会活動や生徒会活動などの日々の活動」($\chi^2(3)=10.727, p<.01$)、「部活動などの課外活動」($\chi^2(3)=6.600, p<.05$)、「職場の見学」($\chi^2(3)=7.269, p<.05$)、「職場での体験活動」($\chi^2(3)=9.020, p<.05$)、「高等学校など上級学校の訪問や見学・調査」($\chi^2(3)=9.999, p<.01$)、「高等学校など上級学校の体験入学」($\chi^2(3)=8.696, p<.05$)、「卒業生の体験発表会」($\chi^2(3)=4.820, p<.10$)、「先生(校長先生や担任の先生など)の体験談」($\chi^2(3)=4.678, p<.10$)、「卒業後の進路(進学や就職)に関する情報の入手方法とその利用の仕方」($\chi^2(3)=9.390, p<.01$)、「将来の職業選択や役割などの行き方や人生の設計」($\chi^2(3)=13.759, p<.01$)、「高等学校など上級学校や企業への合格・採用の可能性」($\chi^2(3)=6.682, p<.05$)、「社会人・職業人としての常識やマナーについての学習」($\chi^2(3)=6.363, p<.05$)、「社会全体のグローバル化(国際化)の動向についての学習」($\chi^2(3)=5.486, p<.10$)、であった。

【図4】 具体的目標設定別に見た学級担任が重視する項目（学校調査・学級担任調査）



※ ここでは、「とても重要だと思う」と回答した割合を取り上げて比較した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「諸計画に基づくキャリア教育の実施」($\chi^2(3)=15.743, p<.01$)、「キャリア教育を実施するための時間の確保」($\chi^2(3)=6.811, p<.10$)、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫」($\chi^2(3)=9.063, p<.05$)、「キャリア教育に関する研修などへの参加による自己の指導力の向上」($\chi^2(3)=12.256, p<.01$)、「社会人や保護者の講話など、地域や家庭の教育力の活用」($\chi^2(3)=6.418, p<.10$)、「キャリア教育の成果に関する評価」($\chi^2(3)=8.530, p<.05$)であった。

たのは、「将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計」(4.6 ポイント差)、「高等学校など上級学校の訪問や見学・調査」(3.8 ポイント差)、「将来の(転職希望者や再就職希望者などへの)就職支援の仕組についての学習」(3.4 ポイント差)、「卒業生の体験発表会」(3.3 ポイント差)、「近年の若者の雇用・就職・就業の動向についての学習」(3.3 ポイント差)、「先生(校長先生や担任の先生など)の体験談」(3.2 ポイント差)、「卒業後の進路(進学や就職)に関する情報の入手方法とその利用の仕方」(3.1 ポイント差)、「高等学校など上級学校の体験入学」(3.0 ポイント差)などであった。

4) 全体計画内の「具体的目標設定」は、担任の、キャリア教育の計画・実施に関する重要性の認識を強める(学校調査、学級担任調査より)

「具体的目標設定あり」の中学校の学級担任と「具体的目標設定なし」の中学校の学級担任との間で、学級内でキャリア教育を適切に行っていく上で、現状から、今後どのようなことが重要になると思うかについて認識が異なるのかを検討した(図4)。

その結果、キャリア教育の計画・実施に関する19項目全てにおいて、「具体的目標設定あり」の方がその割合は高く、キャリア教育推進の必要性を担任教員は感じていることがうかがえた。

特に差が大きかったのは、「キャリア教育に関する研修などへの参加による自己の指導力の向上」(10.1 ポイント差)、「諸計画に基づくキャリア教育の実施」(8.5 ポイント差)、「社会人や保護者の講話など、地域や家庭の教育力の活用」(8.5 ポイント差)、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫」(8.2 ポイント差)、「卒業後の就職や進学の指導に関する副読本などの活用」(6.2 ポイント差)、「進路学習における生徒主体の活動、運営」(5.9 ポイント差)、「体験活動における受入事業所等の開拓」(5.9 ポイント差)、「キャリア教育に関わる体験的な学習(職場体験活動や社会人による講話など)の充実」(5.6 ポイント差)などである。

これらの結果を整理すると、全体計画は生徒にとって重要であるのみならず、担任の意識や保護者の意識との関わりからも大切であると考えられる。重点目標や具体的目標設定がなされた全体計画の下では、生徒は進路に関わる体験活動に積極的に取り組み、行われているキャリア教育を役に立つと実感する傾向が見られており、計画が影響を及ぼすことが確認できる。そして、生徒のみならず、担任にもキャリア教育推進の必要性を意識するよう促しているものと考えられる。また、子供の進路に関する情報収集に積極的な保護者の願いを理解する点においても、全体計画における明確な位置付けによる方向付けが関わっているものと推察される。

中学校においても、各学校が置かれている状況に鑑み、全体計画にどのような項目を盛り込んでいくかは大切なポイントと考えられる。

② 職場体験活動の効果

ほとんどの中学校では、キャリア教育の一環として「職場体験活動」に取り組んでおり、約9割の中学校では第2学年において職場体験活動を実施している。職場体験活動は、生徒が学ぶことの意義を知り、主体的に進路を選ぶ態度を培うことのできる、重要な教育活動である。ここでは、次に掲げる二つの条件に当てはまる学校を「職場体験充実群」、それ以外の学校を「職場体験非充実群」と分類した。

条件①第2学年において、職場体験に「4日間以上」取り組んでいること

条件②「キャリア教育の計画を立てる上で重視したことがら」として、「職場体験活動や社会人による講話など、職業や就労に関わる体験活動を充実させること」と「職場体験活動などの体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」の両方を選択していること。

そして、「職場体験充実群」に分類される中学校の生徒と「職場体験非充実群」の中学校の生徒との間で、どのような意識の違いが見られるかを検討した。

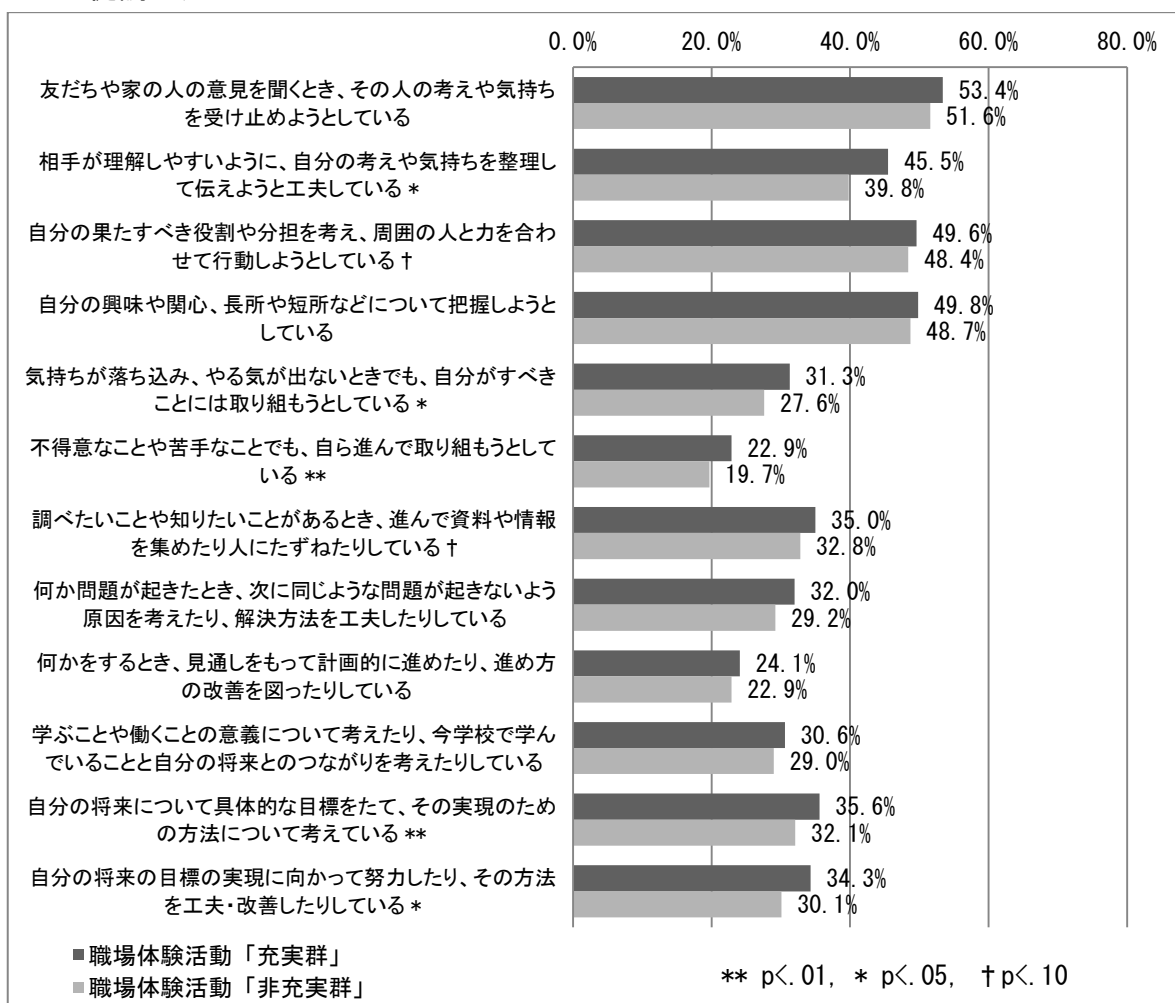
1) 職場体験の充実は、日常生活において生徒の積極性を高める（学校調査、生徒調査より）

生徒が「自分の日常生活の様子」を振り返ったとき、各項目について「いつもそうしている」と回答した割合をグラフ化したのが図5である。

「職場体験充実群」の中学校の生徒の方が「職場体験非充実群」の中学校の生徒よりも全ての項目において「いつもそうしている」割合が高く、積極的、前向きな学校生活を送っていることがうかがわれる。その中でも差が大きいのは、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えようと工夫している」(5.7ポイント差)であった。大きな差とまでは言えないが、一定の差が見られたのは「自分の将来の目標の実現に向かって努力したり、その方法を工夫・改善したりしている」(4.2ポイント差)、「気持ちが落ち込み、やる気が出ないときでも、自分がすべきことには取り組もうとしている」(3.7ポイント差)、「自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えている」(3.5ポイント差)、「不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしている」(3.2ポイント差)、「何か問題が起きたとき、次に同じような問題が起きないように原因を考えたり、解決方法を工夫したりしている」(2.8ポイント差)であった。

このように、職場体験充実群の学校に所属する生徒の方が、職場体験非充実群の学校に所属する生徒よりも日常生活で積極的に活動している。

【図5】職場体験充実・非充実群別に見た生徒が評価した日常生活の様子（学校調査・生徒調査）

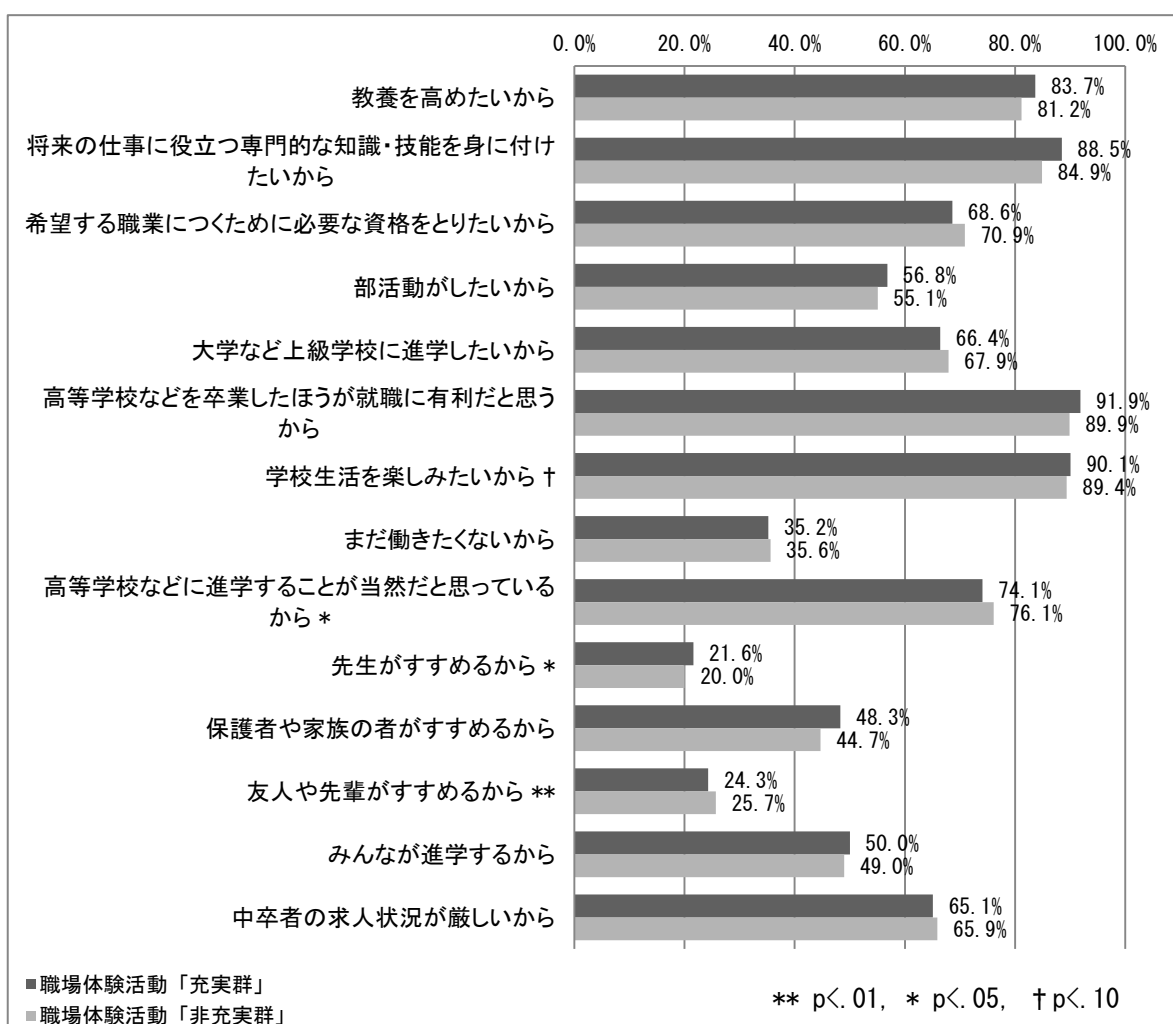


※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えようと工夫している」($\chi^2(2)=8.706, p<.05$)、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとしている」($\chi^2(2)=5.581, p<.10$)、「気持ちが落ち込み、やる気が出ないときでも、自分がすべきことには取り組もうとしている」($\chi^2(2)=6.421, p<.05$)、「不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしている」($\chi^2(2)=10.579, p<.01$)、「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人にたずねたりしている」($\chi^2(2)=5.624, p<.10$)、「自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えている」($\chi^2(2)=11.087, p<.01$)、「自分の将来の目標の実現に向かって努力したり、その方法を工夫・改善している」($\chi^2(2)=7.832, p<.05$)であった。

2) 職場体験の充実は、進学する際、将来の仕事に役立つという理由を生徒に意識させる(学校調査、生徒調査より)

「職場体験充実群」と「職場体験非充実群」との間で、生徒の高校進学理由に違いが見られるかを検討した(図6)。「職場体験充実群」の方が高いのは、「将来の仕事に役立つ専門的な知識・技能を身に付けたいから」(3.6ポイント差)、「保護者や家族の者がすすめるから」(3.6ポイント差)、「教養を高めたいから」(2.5ポイント差)などで、知識や技能、教養といった力を身に付けることを意図している傾向性が見られる。逆に、「職場体験非充実群」の方が高いのは、「希望する職業につくために必要な資格をとりたいたから」(2.3ポイント差)、「高等学校などに進学することが当然だと思っているから」(2.0ポイント差)

【図6】職場体験充実・非充実群別に見た生徒の高校進学理由（学校調査・生徒調査）



※ ここでは、各項目で肯定した（「とても思う」＋「思う」）割合を比較した

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「学校生活を楽しまたいから」（ $\chi^2(3)=6.659, p<.10$ ）、「高等学校などに進学することが当然だと思っているから」（ $\chi^2(3)=8.110, p<.05$ ）、「先生がすすめるから」（ $\chi^2(3)=8.872, p<.05$ ）、「友人や先輩がすすめるから」（ $\chi^2(3)=12.075, p<.01$ ）であった。

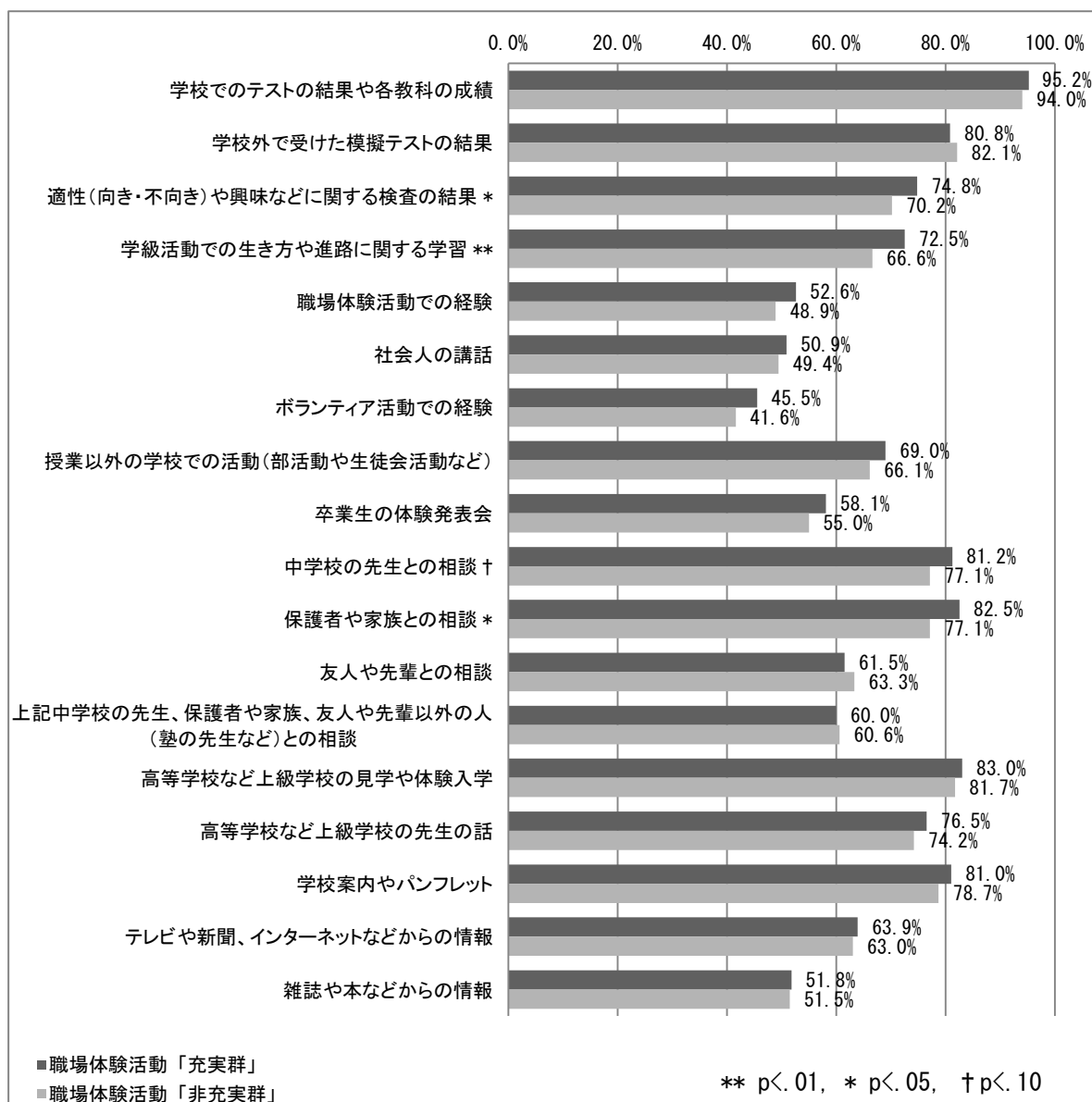
などで、若干ではあるが、資格等の外形的な側面が重視されているように思われる。

3) 職場体験の充実は、様々な事柄を踏まえて高校選択をしたいという生徒の意識を高める（学校調査、生徒調査より）

「職場体験充実群」の中学校の生徒と「職場体験非充実群」の中学校の生徒との間で、「高校選択時に参考にしたい程度」に違いが見られるかを検討した（図7）。「職場体験充実群」の中学校の生徒の方が、18項目中15項目で参考にしたいと答えた割合が高く、より様々な事柄を踏まえながら進路選択をする傾向が認められる。

特に差が大きいのは、「学級活動での生き方や進路に関する学習」（5.9ポイント差）、「保護者や家族との相談」（5.4ポイント差）であった。大きな差とまでは言えないが、「適性（向き・不向き）や興味などに関する検査の結果」（4.6ポイント差）、「中学校の先生との相談」（4.1ポイント差）、「ボランティア活動での経験」（3.9ポイント差）、「職場体験活動での

【図7】 職場体験充実・非充実群別に見た生徒の高校選択時に参考にしたい項目（学校調査・生徒調査）



※ 各項目で肯定率（「とても参考にしたい」＋「ある程度参考にしたい」割合）を比較した

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「適性（向き・不向き）や興味などに関する検査の結果」（ $\chi^2(3)=8.077$, $p<.05$ ）、「学級活動での行き方や進路に関する学習」（ $\chi^2(3)=15.658$, $p<.01$ ）、「中学校の先生との相談」（ $\chi^2(3)=6.591$, $p<.10$ ）、「保護者や家族との相談」（ $\chi^2(3)=10.962$, $p<.05$ ）であった。

経験」（3.7ポイント差）、「卒業生の体験発表会」（3.1ポイント差）でも差が見られた。

以上のように、「職場体験充実群」の学校に所属する生徒の方が、日常生活で積極的に活動し、様々な事柄を踏まえながら進路選択をする傾向が認められる。進路選択に当たっても、知識や技能、教養といった力を身に付けることを意図している傾向が見られ、総じて主体的であると推察される。

③ キャリア教育の推進と学習意欲

キャリア教育による学習意欲の向上は、極めて重要なトピックである。そこで、次に掲げる二つの条件に当てはまる学校を「学習意欲向上認知群」、それ以外の学校を「学習意欲向上非認知群」と分類した。

条件①「学校調査」問 13 にて「キャリア教育の実施によって、学習全般に対する生徒の意欲が向上してきている」と回答、及び、

条件②「学級担任調査」問 4 にて「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」と回答

1) 「学習意欲向上認知群」の学級担任の方が、より積極的にキャリア教育を推進している（学校調査、学級担任調査より）

学級担任に尋ねた「学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施の現状」16項目について回答した割合を比較した（図 8）。

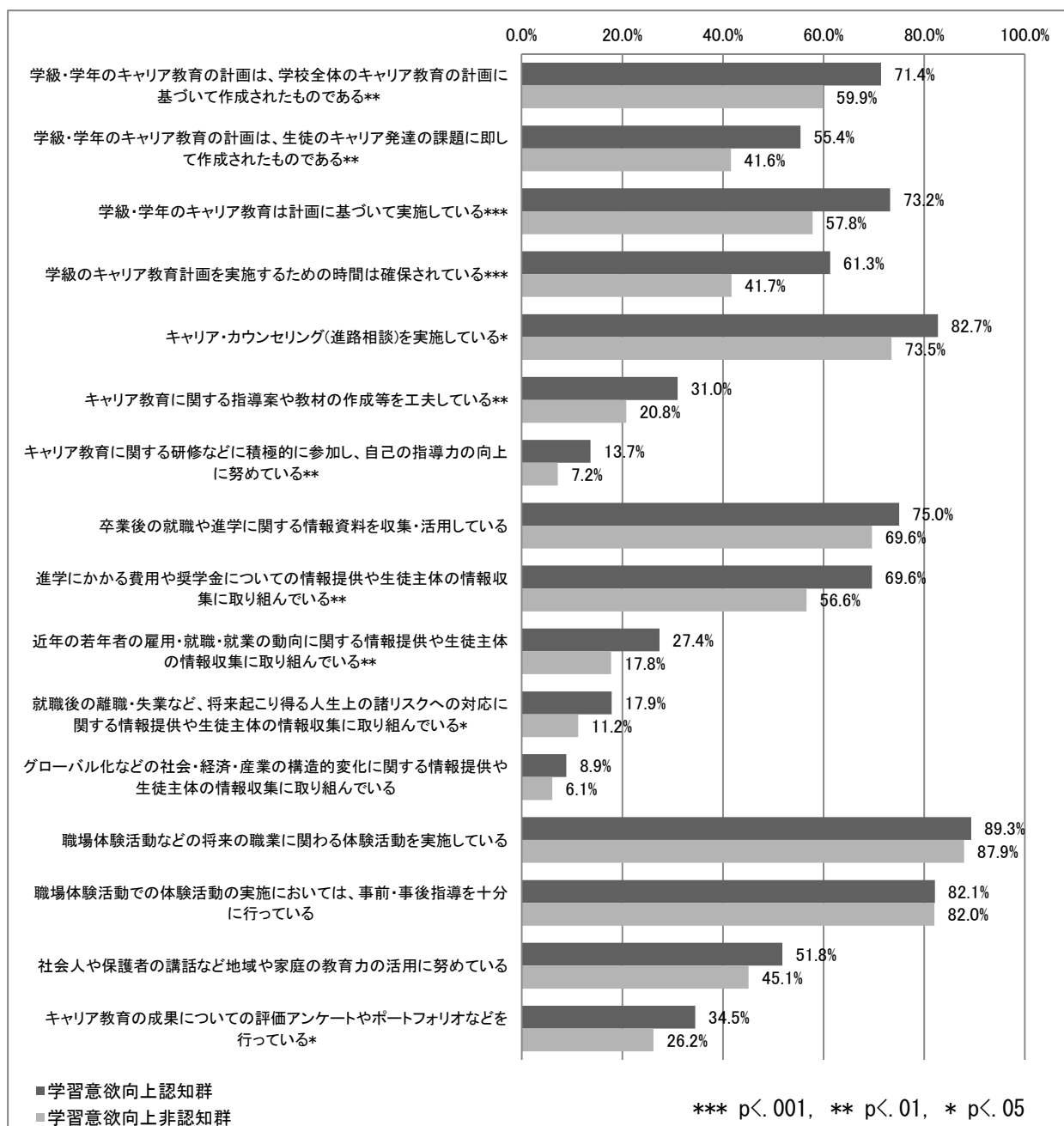
まず全体を見ると、16項目全てにおいて「学習意欲向上認知群」の方が「学習意欲向上非認知群」よりも「そのとおりである」と回答した割合が高い。その中でもポイント差の大きい項目を順に挙げると、「学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている」（19.6 ポイント差）、「学級・学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」（15.4 ポイント差）、「学級・学年のキャリア教育の計画は、生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」（13.8 ポイント差）、「進学にかかる費用や奨学金についての情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」（13.0 ポイント差）、「学級・学年のキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである」（11.5 ポイント差）となっている。

2) 「学習意欲向上認知群」の学級担任の方が、生徒・保護者も積極的にキャリア教育に取り組んでいると評価している（学校調査、学級担任調査より）

学級担任に「学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施に関する生徒や保護者の現状」について尋ねている。ここでは、「そのとおりである」と回答した割合を群間で比較した（図 9）。

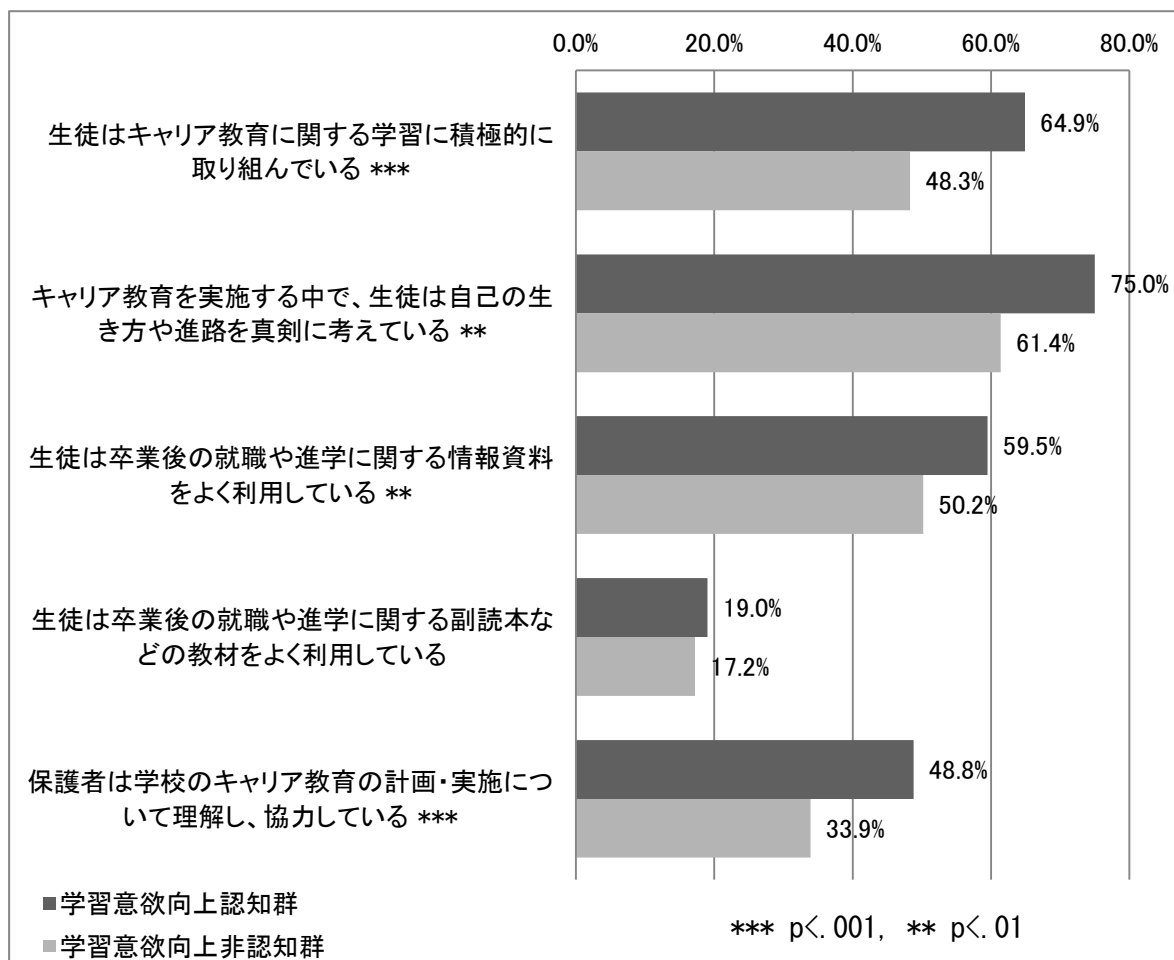
まず全体を見ると、16項目全てにおいて「学習意欲向上認知群」の方が「学習意欲向上非認知群」よりも「そのとおりである」と回答した割合が高い。ポイント差の大きい項目を順に挙げると、「生徒はキャリア教育に関する学習に積極的に取り組んでいる」（16.6 ポイント差）、「保護者は学校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」（14.9 ポイント差）、「キャリア教育を実施する中で、生徒は自己の生き方や進路を真剣に考えている」（13.6 ポイント差）である。

【図8】学習意欲向上認知の有無別に見た担任が評価したキャリア教育の計画・実施の現状（学校調査・学級担任調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「学級・学年のキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである」 ($\chi^2(1)=7.722$, $p<.01$)、「学級・学年のキャリア教育の計画は、生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」 ($\chi^2(1)=10.597$, $p<.01$)、「学級・学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」 ($\chi^2(1)=13.811$, $p<.001$)、「学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている」 ($\chi^2(1)=21.359$, $p<.001$)、「キャリア・カウンセリング(進路相談)を実施している」 ($\chi^2(1)=6.290$, $p<.05$)、「キャリア教育に関する指導案や教材の作成等を工夫している」 ($\chi^2(1)=8.129$, $p<.01$)、「キャリア教育に関する研修などに積極的に参加し、自己の指導力の向上に努めている」 ($\chi^2(1)=7.487$, $p<.01$)、「進学にかかる費用や奨学金についての情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」 ($\chi^2(1)=9.718$, $p<.01$)、「近年の若年者の雇用・就職・就業の動向に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」 ($\chi^2(1)=8.012$, $p<.01$)、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」 ($\chi^2(1)=5.556$, $p<.05$)、「キャリア教育の成果についての評価アンケートやポートフォリオなどを行っている」 ($\chi^2(1)=4.743$, $p<.05$)であった。

【図9】学習意欲向上認知の有無別に見たキャリア教育の計画・実施に関する生徒・保護者に対する担任の評価の現状（学校調査・学級担任調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られたのは、「生徒はキャリア教育に関する学習に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1)=15.267, p<.001$)、「キャリア教育を実施する中で、生徒は自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1)=11.129, p<.01$)、「生徒は卒業後の就職や進学に関する情報資料をよく利用している」($\chi^2(1)=4.820, p<.01$)、「保護者は学校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」($\chi^2(1)=276.880, p<.001$)であった。

④ まとめ

今回の分析結果は、中学校においても全体計画は生徒や担任、保護者の意識や行動に関わりをもち、キャリア教育を一層推進する観点からも重要であることを示唆している。また、事前・事後指導も含め職場体験が充実していることは重要で、日常生活における生徒の積極性や、将来役立つ専門的な知識・技能を身に付けようとする態度に大きな影響を及ぼす可能性があることが明らかとなった。さらには、キャリア教育をより積極的に推進している学校や学級の生徒の方が、学習意欲が向上している可能性が高いことが示唆された。

したがって、中学校では、キャリア教育の全体計画を立て、職場体験活動をはじめ、様々な実践を着実にやることによって、生徒の日常生活への取組がより積極的になり、学びに対する意欲も向上すると期待される（学習意欲の向上については、中学校（3）P68も参照のこと）。

(3) 学習意欲（向上）との関連（中学校編）

中学校においては、学校がキャリア教育を全校的に推進していれば、生徒の学習意欲は向上する（表1）。分析の結果を踏まえると、キャリア教育の取組を10程度、全校的に推進すると、学校管理職又は担任（若しくはその双方）が実感するくらいに、生徒の学習意欲は向上する。具体的にどういうことに取り組みれば良いかについては、第一次報告書（P134）の中学校調査「キャリア教育の現状」又は本報告書附表欄（P134）を確認してほしい。

また、学級においてキャリア教育を推進していることにも、全校レベルに比べると弱まるが、影響力がある。そして、キャリア教育に生徒・保護者が取り組むこともまた学習意欲の向上に結び付く可能性がある。つまり、学校や学級においてキャリア教育が充実するほど、キャリア教育に保護者の協力をえて生徒が取り組むよう促されるほど、学習意欲の向上に結び付くということである。

中学校の現場では、職場体験活動を核としたキャリア教育において学びと実社会がつながり、生きることや働くことと向き合えば学習意欲が向上するだろうという肌感覚があったはずだが、本分析もそれを支持し、実感を裏付ける結果がえられている。本分析結果や第一次報告書の具体的取組を参考にいただき、学校そして学級においてキャリア教育に取り組める体制づくりを心がけていただき。また、体制づくりができた学校・学級においては、保護者の理解や生徒の取組を促すよう働きかけることがポイントである。

【表1】「学習意欲向上認知得点」への重回帰分析の結果

独立変数	β	有意確率
学級におけるキャリア教育推進得点	.125 **	0.001
キャリア教育に関する生徒・保護者の取組得点	.089 *	0.014
学校におけるキャリア教育推進得点	.364 ***	0.000
人間関係形成・社会形成能力得点	.082 *	0.022
自己理解・自己管理能力得点	-.060	0.103
課題対応能力得点	.065 †	0.071
キャリアプランニング能力得点	.065 †	0.062
R^2	.224 ***	0.000

※ † p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001 ※強制投入法による

※ なお、この分析結果は重回帰分析を用いて次の7つの項目が「学習意欲の向上」にどれだけ影響するかを検討したものである。①学校においてキャリア教育を推進しているか、②学級においてキャリア教育を推進しているか、③キャリア教育に関して生徒・保護者が取り組んでいるか、基礎的・汎用的能力の4つの能力、具体的には、④人間関係形成・社会形成能力、⑤自己理解・自己管理能力、⑥課題対応能力、⑦キャリアプランニング能力を担当が重点的に指導しているか。分析の詳細については、附表欄に示したので参照してほしい。